

雑学ノート「歴史を歩く」

伊 藤 玄二郎

1. エヴォラ屏風下張文書

エヴォラは、ポルトガルの南部に位置するアルト・アレンテージョ地方の中心都市。ローマ時代にはエヴォラ・リベラリタス・ユリアと呼ばれ既に栄えていた歴史のある町である。

ローマ時代の神殿の遺跡からロマネスクやロココまでの多彩な様式の重要な建築物を目にすることができるため、一名「博物館都市」と呼ばれている。エヴォラの歴史地区は1986年に世界文化遺産に登録された。

私がエヴォラ古文書館で、屏風の下張りに使われていた安土桃山時代の古文書を初めて目にしたのは今から20数年前のことである。400年の時を隔てた古文書は、誰の目にも傷みの激しさがわかるものだった。このままでは日本とポルトガルの歴史的、文化的な交流の貴重な史料が、朽ちてしまうかもしれない。私の胸中に、通称「エヴォラ文書」と呼ばれる古文書の修復を急がねばならないという思いが浮かんだ。

1998年4月、エヴォラ文書の400年ぶりの日本への“里帰り”がJT（日本たばこ産業株式会社）の協力を得て実現した。京都国立博物館文化財保存修理所に運ばれた古文書は「劣化」に歯止めをかける処置が施され、トーレ・ド・トンボ国立古文書館で行われたセレモニーで再び、ポルトガル側へ返還することができた。

2. エヴォラ文書の発見

現在、日本の都会の家庭生活の中では屏風を使用することは少なくなった。しかし寺社や日本旅館、あるいは地方の旧家で目にする機会はまだまだ多い。

「下張り」は通常、屏風や襖をつくる時、その下地骨に幾層にも紙を張ることをいう。むかしは紙が貴重だったため、不要になった大福帳や文書類などの、いわゆる反故紙が下張りに使用された。

当時、文書に用いられた貴重な紙は、厚くて丈夫だった。そのため、エヴォラ文書のように、時として、文化財的な価値がある屏風や襖を修理するときに貴重な古文書が発見されることがある。

「エヴォラ文書」の存在は、1902年（明治35）、リスボン国立図書館を訪れた日欧交渉史

の権威村上直次郎がいくつかの興味深い古文書を屏風の下張りから“発見”したことによる。

村上が発見した文書は次の通りである。

- 1 ルイス・フロイスの署名したポルトガル文書状
- 2 イルマン・ヴィセンテ、安威五左衛門尉志門などの往復書翰数通
- 3 小西如清外二名のオルガンチーノ宛書状
- 4 オルガンチーノよりヴィセンテ宛日本文書状 など

ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスの著述『日本史』は、1549年から1593年にかけての日本での布教についてのみならず、当時の日本の政治状況について知るための重要な史料となっている。

安威五左衛門は豊臣秀吉の右筆で秘書役だった人物。秀吉の有力な家臣のなかには五左衛門はじめ高山右近、小西行長らキリシタンが少なくなかった。如清は行長の兄である。

1960年、歴史学者の松田毅一がエヴォラ古文書館を訪れ、松田は新たに発見した下張り文書を古文書館の職員を助手にして解装、採録した。

松田が発見し解装した文書のほとんどは「ヴァリニャーノのカテキズモ」「オルガンチーノの入満心得の事」という日本語に訳された、教理の講義や修道士志願者に対する心得の文書である。

3. 文書の出どころは安威家

屏風、古文書は、なぜエヴォラにあったのか。それはポルトガルのイエズス会の本拠地がエヴォラにあったことに大きな理由がある。

1902年に村上直次郎が発見した文書は長い間、行方不明とされていた。1983年、九州大学の中村質教授はリスボンにある国立図書館で紙挟みにとじられた未整理の文書を見せられた。それが不明となっていた文書だと中村は断定する。

文書を調査、研究した中村は、著書『近世長崎貿易史の研究』（吉川弘文堂）に次のようなことを書いている。

エヴォラ古文書館で発見された文書とリスボンで中村が改めて発見した「文書」は一つの屏風（六曲らしい）の下張りであること。

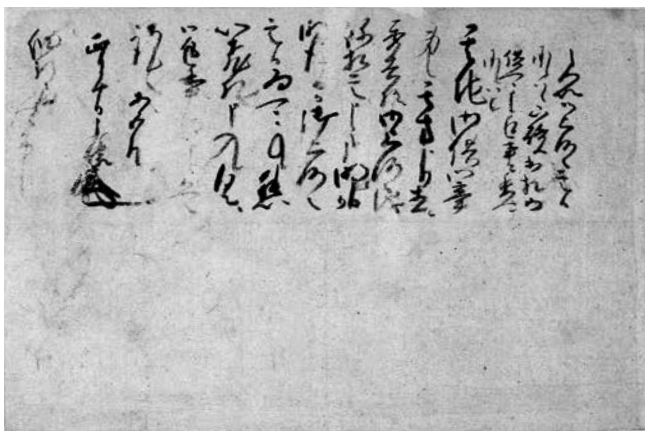
下張りの「古文書」の年次は、1585年（天正13）を中心に、前後のせいぜい一、二年間のものと考えられる。

書状の宛所は先にも述べた安威五左衛門がきわだっただけ多い。屏風の下張り文書が秀吉の右筆・奏者・代官で、シモンの霊名を持つ安威五左衛門家から出た可能性が大きい。

安威が秀吉の側近の一人であったことは、キリシタン勢力の発展にとって、陰に陽に大きな支えであったに違いない、と。

安威家から出たとされ、エヴォラ古文書館、リスボン国立図書館に所蔵されている興味深い幾つかの下張文書をここに紹介する。

4. 安威五左衛門書状



「尚以御上洛候定日
承候ハ、山崎へわれ御
供可申候。返事ニ委可
承候。以上。
其地御供御寄
身之其方より直ニ
秀吉様御上洛之儀
弥相定申候哉。明日か
明後日か御上洛之
定日為可承候。態
以飛札申入候。具ニ
御返事
謹言。
安五左
正月十日 了佐 (花押)」

図1 安威五左衛門文書

本能寺の変の後、洛中にある安威が山崎の宝寺（宝積寺）に新城を築いていた秀吉側近に宛てた書状である。秀吉がいつ上洛するのか。その日取りが決まれば自分（安威）は出迎えに行く用意がある。知らせて欲しいという内容だ。

歴史学者の説明によれば、正月十日は1583年（天正11）、秀吉が澁川一益・柴田勝家の動きを読み、前年末、近江長浜城の柴田勝豊を開城に追い込み、ついで岐阜に信孝を囲み、勝家の南下に備え、近江北辺に城壁を構築していたところのこととなるという。一枚の書状が当時の武将たちの緊迫した様子を知らせてくれる。

5. ルイス・フロイスの手紙

松田毅一氏によれば、フロイスの自筆自署の書翰は、全世界で28通の所在が確認されているので、これは29通目となる。

書状の主な内容を要約すると次のようになる。

フロイスの手紙はジェロニモ修道士に宛てられたものだ。それに先駆けて、ジェロニモ修



図2 ルイス・フロイスの手紙署名文書

道士はフロイスに手紙を送り、セミナリオ内の少年たちの衣服の不足や十分でない食糧など窮状を訴えている。

しかし、フロイスの回答は思わしくない。手紙の中には、オルガンチーノ、ダミアン・マリムなど当時、日本で布教活動にあたった宣教師の名がみえる。

中村質氏の解説によれば、宛名のジェロニモ修道士は1579年又は80年に日本でイエズス会に入会したポルトガル人。安土以来、畿内のセミナリオの教師を務め、1587年伴天連追放令で畿内を追われ、同年長崎で死去した。

オルガンチーノは1570年に渡来したイタリア人宣教師である。1581年には安土にセミナリオ開校。本能寺の変・安土城の焼失の後、高山右近領の高槻へ。さらに明石移封により大坂に移され、長崎に移る。

同じくフロイスの手紙に登場するダミアン・マリムは、1583年渡来のスペイン人。1586年9-10月(天正14年8、9月)、大坂セミナリオの運営と講義を担当。1592年には長崎に移り、1598年マカオで死去したとされる。

安土セミナリオの創設当時の生徒は上流階級の子弟に限られ、生活費は自己負担が原則であった。しかし高槻に移ると、領主の右近がセミナリオの維持費を補助し、衣服、食料、そ

の他の必需品をあてがった。ところが、それから間もなく右近からの援助は絶え、生徒たちの生活は困窮していった。その後間もなく、伴天連追放令が出る。刻一刻と変化する歴史の流れと息づかいをこの書翰は物語っている。

6. 加賀松任町惣中言上書



「御書謹而拝見仕候、
仍兵部買申候馬之儀被
仰下候、越中へ売申候へ共、
御意之事候間、曳返二遣申候、
伊兵衛参次第相渡
可申候、此中も暖申候
筋モ御座候間、何様ニも
御詫次第候、委曲藤岡
宗誉可被仰上候、恐惶
謹言
松任町
卯月十五日 惣中」

図3 松任町文書 (2)

書状の大意は次のようである。

「謹んで書状を拝見しました。兵部が購入した馬は一度は越中へ売却しましたが、御意の申しつけで、馬を引き渡すことにします。色々な意見もありますが 伊兵衛が参り次第、渡します。」

1585年2月、前田利家は、秀吉の佐々攻略命により、船舶の領外出航を禁じている。つづいて4月2日、秀吉は上杉景勝に5月に越中へ出陣する旨を告げている。つまり、日付については卯月十五日は、1585年4月15日という推測がなり立つ。

「言上書」は秀吉の意を受けた側近、安威了佐が、越中の佐々氏との契約の破棄を求めた書状を松任町惣中におくり、松任町の惣中はこれを了承した、という安威宛の返事と思われる。

「下張文書」には歴史を旅する醍醐味がある。

7. 玄任の妻

ところで松任町惣中が心変わりしたのは秀吉、あるいはこの時期、秀吉と表裏一体であった利家の威光によるものであろうか。

この書状に秘められた惣中の`心、を読むにあたっては松任町の歴史的背景に触れる必要がある。

金沢は戦国の序章から一向一揆の盛んなところだった。1488年、加賀の守護富樫政親は一向一揆の攻撃を前にして自決。以後、松任城は一向一揆の旗本鍋木氏の居城となった。一向衆の勢力が隣国の越前に攻めこむ勢いまでとなった時のことである。

永井路子氏の『日本史にみる女の愛と生き方』（新潮文庫）に次のような話が載っている。

1503年（文亀三）、「敵陣へ進む足は浄土へ行く足じゃ、もし退却するようなことがあれば、その足は、すなわち地獄へ行く足じゃ」

指揮をとる僧たちの叱咤の声を背に、一向宗徒の農民たちは敵地めがけて突進した。だが、戦いに利あらず。越前の支配者、朝倉貞景の猛反撃をうけて敗退。景気よく戦意を煽っていた僧侶たちも、こそこそ逃げかえった。

しかし、このとき、ひとり敵地にとどまり奮戦した土豪がいた。石川郡の玄任とその旗の下に武器をとった松任組の一団300人である。果敢に戦い全員壮烈に戦死した。

加賀へ逃げかえったリーダーの僧侶のところへ、残された玄任の妻がやって来て、声をあげて泣き悲しんだ。

僧侶は「さぞや辛かろう、しかし、ご亭主は、教えを信じて戦い死んだのだから極楽往生まちがいなし」としきりに彼女をなぐさめた。

すると女房は、きつと顔を上げ僧侶に向かって言ったのだ。夫と死に別れたのが悲しくて泣いているのではない。夫は、一歩もひかずに戦った。だから極楽往生は疑いない。なのに、あなたは味方を見捨てて逃亡した。

「逃げる足は地獄へと行く足一」あなたはそうおっしゃった。するとお坊さまは間違いなく地獄行き、それがいたわしい、と。

このエピソードの痛烈な皮肉、は指導者たる僧侶の欺瞞的な仮面を見事にひんいたと永井氏は書く。

佐々への売買契約を破棄し、秀吉前田陣営に馬を売り渡した一。この松任町惣中の決断は、単に佐々と秀吉、前田を天秤にかけたものではない。歴史が証明してきた事実関係を素早く計算し、導き出した高度の政治的判断だった、と永井路子氏は言う。戦国の世を生きた町民のしたたかさである。

8. ポルトの南蛮屏風

今年 2014 年 5 月 2 日、安倍晋三総理大臣がポルトガルの首都リスボンを訪問、翌 3 日、天正遣欧少年使節団ゆかりのエヴォラ大聖堂も見学した。500 年近い日本とポルトガルの歴史の中で、初めての総理大臣訪問だった。

この訪問の際、安倍総理はエヴォラ古文書館で南蛮屏風下張文書修復プロジェクトの説明を受け、私が 1998 年に修復した「下張文書」を視察した。

その後、日本、ポルトガル両国首相により発表された「共同コミュニケ」の中で「五世紀に亘る歴史に基づく両国史料館同士の交流を強化」が記述された。

このことがきっかけとなって、ポルトのソアレス・ドス・レイス国立博物館から「当館が所蔵する『南蛮屏風』に大量の下張りが存在するようだ。一度調べて欲しい」とリスボンの日本大使館に連絡があった。

ポルトはリスボンに次ぐポルトガル第二の都市で、ポルトワインの産地として世に知られる。

7 月、私はポルトガルへ飛んで、リスボンにいる東博史駐ポルトガル日本大使とソアレス・ドス・レイス国立博物館を訪れた。確かに六曲一双十二扇の屏風の下張りの中には、半紙大にして二千枚から三千枚の下張り文書の存在が推定される。

11 月 25 日から京都国立博物館の修復工房の四人の技術者の協力を得て解装作業を進める予定だ。

果たして歴史の新たな大発見はあるのか、想像は果てしなくふくらむ。

〈参考文献〉

『近世長崎貿易史の研究』中村質／『スペイン・ポルトガルを知る事典』平凡社〈エボラ〉の項、彌永史郎／『エヴォラ屏風文書の研究』松田毅一、海老澤有道／『国民大百科事典』平凡社／『現代日本 朝日人物事典』朝日新聞社〈村上直次郎〉の項、中村孝志／『エヴォラ屏風の世界』伊藤玄二郎編